

古民家と家の継承

房総で住宅の仕事をしたとき、S社の社長が住む地域に残る貴重な古民家の継承について話をした。S社はM市にありこの地域には立派な古民家が点在している。そこには白壁と燻し銀の瓦屋根が緑に包まれ、日本の良き風景がまだ残っている。



土呂の長屋門

S社が手がけた古民家をリフォームした住まいを見せてもらった。その住まいは玄関に入ると広いホールに大きな柱や梁が豪快に掛かり、骨太の質感を表している。こうした佇まいの住まいは特別の建物ではなく、今でも全国的に見られる。こういった古民家は代々継承され、当主は地元で根を下ろして生活をしている。

S社の社長は言う。地元の古い家の家族と息長く付き合ってきていることもあり、古い家の良さを時には話したり、また住人も代々の建物を大事にしているからこそリフォームの仕事が依頼される。自分の代で家を潰してしまっただご先祖様に申し訳ないと考えているからだと言う。ご先祖様を持ち出すのは田舎の考えであり、封建的名残と言ってしまう事はお終いだ、この考え方は見過ごしてはならない大事な点だと私は思う。



台東区安田邸

残念ながらこの古民家も時代の変化に追われ、当地もご多分にもれず消滅していることを社長は嘆いていた。今それが若い世代に相続されると、地縁関係も切れ、刹那的センスにより古民家はあっけなく解体され、流行の建物にすっかり変わってしまうという。

確かに流行の建物は機能的、合理的、新品で快適だと思うが、一時、家族がご満悦の時代を過ごしたところで、子供たちと暮らしたその住まいは時とともに荒れ果てていく。人の長い一生から考えるとご先祖様が残してくれた古民家の方が「有り難さ」がある。もうひとつの要素はお嫁（婿）さんの思考によって、この古民家の命が左右されると社長はい言う。そのためにもお嫁（婿）さんになる人は「しっかりした考えの人に」来ていただかないと、家や古民家は継承されていかない。

このことは古い考え方であろうか

そのー 2

彼は檀家総代を務めているが、このごろ代が替ると疎遠になる人や、転居してどこにいるのかもわからなくなり、連絡がつかない檀家の人が増えてきている。そのため寺の行事や施設の維持管理が思うようにできなくなっていると言う。



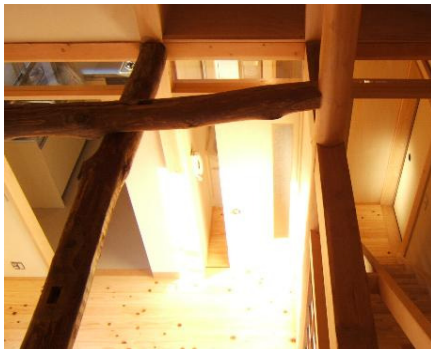
さいたま市、車窓より

古民家は上記のような理由により全国に多くの廃屋が取り残されている。それらが商品化され、骨董品的意味合いでその古材を買って家に使うことが今ブームだが、本来その家のものはその家族が使うのが本筋である、と言う。

古民家ほど古くはないが大正昭和時代の住まいはその時代を映した出したトトロ的味わいがあり、今となると貴重

な文化遺産だと私は考え、建て替えの仕事の時には旧宅の材料を再使用することや、一部保存（リフォーム）することなどの方法を進めている。

もったいない、なつかしい、思い出がある、などは精神的要素を強調しているが、このことは、大変重要な問題と
思っている。それは、まず、材料は無駄にしない（リフューズ）、あるものは再利用する（リユース）、さらに加工して利用（リサイクル）という、ごみ問題で言われている3Rのキーワードにぴったりあてはまるのである。建て替え時の解体材は建設産業廃棄物として膨大な量が出ている。その減量の一端になるが、私がこの再利用に取り組んでいるのは、こうした社会的問題もあるが、その材料をどう生かすかを考え、どう作るかを工夫することが面白いし、そして施主の方が喜んで下さるからである。



旧宅の丸太梁を再利用

今の建物は人々の思いをのせて時代を経て継承していくことができるであろうか？先般S社に長く出入りしていた房総の家を手がけてくださった大工棟梁が亡くなった。彼ら木造の在来工法の大工（職人たち）は技をさまざまに駆使し、木造建築を構築し、仕上げることができる有能な人々である。

現在、木造在来工法ができる腕のある大工の平均年齢は60才※に近いともいわれている。古民家のリフォームや旧材の再利用などの手の掛かる仕事は、彼らなくしてはできない。この2012年は、上記のような仕事はまだできそうか？

かくして都会も田舎からも人々の暮らしを写し込んだ住まいや歴史的建物、景観がとどめなく消去されていく。もったいない！

(2012. 2. 4) ※H22年44.7歳（年収ラボでは）